広報なか

2007 No.30
●発行日／平成19年７月11日発行
●発　行／那珂市
●編　集／市長公室企画課広報係
〒311―0192
茨城県那珂市福田1819―5
●ホームページURL（携帯可）／
http://www.city.naka.lg.jp
●メールアドレス／
kikaku@city.naka.lg.jp

7 目次／Contents

ともに暮らし　ともに輝くために　2
議会　第2回定例会　4
体育指導委員だより　6
歴史民俗資料館だより　水鳥　8
健やか親子那珂21　－第1次母子保健計画－　11
市政だより（特別児童扶養手当）　12
〃　（茨城県後期高齢者医療広域連合通信②ほか）　13
環境ミニトピックス　ほか　15
まちの話題　16
Information　18
市立図書館へ行こう！　20
活き活き人　22
さわやかさん、表紙の裏側　ほか　24

健康のためにはスポーツが一番（那珂市高齢者クラブ連合会スポーツ大会）

水鳥 5

「講」と人々の願い

歴史民俗資料館では、7月21日(土)から9月2日(日)まで企画展「講～人々と信仰～」の展示を行います。「講」については、昨年の『広報なか』(7月号)で一部紹介しましたが、今回はその続編となります。

～甲子講～

甲子講は、甲子または子の日に講中または個人で夜遅くまで起きていて精進供養をする行事で、「子待ち」といい、「甲子待」ともいいます。子待ちの礼拝本尊は大黒天（大国主神）です。この夜、当番の家では赤飯や小豆や大豆・黒豆など豆の入ったご飯やご馳走を作り、一室に大黒天の掛軸をかけ、灯明・供物を供え、講中一同集まって礼拝した後飲食・歓談に過ごす楽しい一夜でした。ご利益としては、作がよくなる、金が貯まる、金銭に不自由しないなどで、庚申よりも福の神的な祝い事の感が強いと思われます。石塔としては市内では、戸崎の鹿嶋神社前にある弘化4年（1847）8月17日に建てられた「甲子供養塔」（右戸村笠間、左御城下と刻字され道しるべにもなっている）と元治2年（1865）2月建立の戸多若宮にあるだけです。

軸装　大国主命（大黒天）

大黒天を甲子の日に祀るようになったのは、大勢の悪がしこい神から火攻めにされたときに、ネズミから「内はほらほら、外はすぶすぶ（すぼんでいる）」と教えられて穴に入り命が助かったとされる大国主命が、大黒天と同体の神とされ、ネズミつまり子と関係ができたからです。甲子講は、早くは室町時代から始まっていましたが、江戸時代には甲子の日に大黒天参りが盛んに行われました。

～お般若さま（オデエハンニャ）～

かつて菅谷の不動院や額田の毘盧遮那寺、飯田の一乗院、下大賀の弘願寺などでは、正月に大般若経600巻を転読の後、お経を経櫃に納めて、当番の者が前後2人でかつぎ区内各戸をまわり拝んでもらっていました。具体的には、回ってきた家の人が次の家までリレー式で運んでいき、運ばれてきた経櫃に対して、御神酒をあげたり、箱の下をくぐったりする。これによって無病息災が約束されるとされました。この日配られた御札を家の入口に貼っておくと万厄が除かれるとする行事です。地域によっては「オデエハンニャ」ともいわれています。後世になると、病気になった家が、寺から1巻ないし数巻を借り出して家で祈祷したことからいつの間にかお経が行方不明になってしまうこともあり、これが600巻が完全に残ることが少なくなってしまった原因でもあるようです。

～大般若経とは～

大般若経は、「大般若波羅密多経」の略称で、唐の玄奘三蔵法師がインドに渡り集めた物で、西暦660年から663年まで約4年間かけてサンスクリット語から漢訳した経典名です。般若波羅密（清浄な心持ちで生き抜くための智恵であり、彼岸に到達するための智恵である）の意義

唐櫃の下をくぐる講中
（千葉県立大利根博物館発行『東総の大般若経』より）

を説く諸経典を集成したもので、完全な形で日本に入ってきたのは遣唐使によってではないかといわれています。早い時期に大般若経が通読されたのは、大宝3年（703）に薬師寺で奉読された記録があり、天長元年（824）4月28日には疫病を防ぐために諸国の寺院に奉読させています。膨大な600巻全部を読む真読は難しいので、1巻ごとにパラパラと転翻していく転読があります。天長4年12月14日には、大極殿（国の政庁の正殿）で3日間、地震の止むことを祈願して100人の僧侶に転読させています。その願いは国家安寧・五穀豊穣でもありますが、怨霊を鎮める、災厄をのがれる、疫病を祓うといった世俗的な苦悩からの離脱の方に重点がおかれるようになりました。その後も偉大な指導者の追善や困難な時代の局面で、地方の豪族などにより発願され、写経や読経などが行われてきました。

～毘盧遮那寺の大般若経～

歴史民俗資料館常設展示室の中世のコーナーには、毘盧遮那寺（額田北郷）所蔵の大般若経（折本、569帖）の一部が展示してあります。今から約510年前の明応8年（1499）の春に筆写が終わり額田郷の鎮守八幡宮に奉納されましたが、水戸藩時代に徳川光圀が仏典を神社に置くことを禁じたので毘盧遮那寺に納められたものです。その最後に記されている「奥書」によれば、発願者（祈願者であり寄進者）である檀那は当時の額田城主小野崎下野守善通（義通）を大旦那とするほか小野崎通老ら50人で、筆者は額田北郷森戸にあった連蔵院の仕僧理順坊順海ら30人余りです。はじめは巻本10巻を1箱とし、唐櫃3合（3箱の意味）に納められていましたが、約200年後の元禄14年（1701）に住職の宥精と弟子の宥円らによる修正があり、折帖に修造されました。その後も何度か修正され、そのたびに奉納者名・細工人名が記されています。宝暦5年（1755）・6年には額田村の鈴木左門・鈴木市十郎、根本七衛門、米崎村の福地理衛門ら多数が寄進者になっています。

毘盧遮那寺の大般若経

ここの大般若経の写経のきっかけは、明応3年（1494）3月10日の夜に、白衣の神体が順海の師である朝海法印の枕元に現れて「千早経八重幡雲御法爾和太伊波羅若於備天志加志（ちはやぶるやえはたぐものみのりにわたいはらにゃをそなえてしか）」との一首を賜った。そこで、早速大般若経書写の願いを立てようと、このことを額田城主へ披露し、諸処方々へ助力・助筆を依頼し、はじめに大般若経の理趣分第12巻のみを筆写し納めたとのことです。内実は、約100年続いた佐竹の乱（応永14年、1407～永正元年、1504）といわれた佐竹氏族の抗争の間であり、戦乱の最中にも平和が戻ったその時に額田氏の結束をはかり、領内の安定と平和を願ってのことと思われます。寺では、正月16日、大般若経転読・護摩焚きの「星祭り」が行われています。

～菅谷延命院の大般若経～

また、常陸太田市大里の来迎院に残る大般若経（434巻のみ、折本ではなくノート型に綴られている）は、菅谷下宿西にあった延命院（天保の社寺改革で廃寺）のものが含まれています。書写のはじめは、毘盧遮那寺本より早い応永25年（1418）の記録があります。それが、戦国時代に数回修復され、天正7年（1579）には完了しています。経典の寄進者には「佐竹額田住」の谷田部・平野・井上・高畠・内桶氏をはじめ女性や子どもも含まれています。皆々が、「滅罪生善、安穏快楽」・「二世安穏」を願ったものです。

これら講や写経などからうかがえるように、いつの世でも、庶民の生活の中では、高くは天下泰平の祈りから、日常における無病息災・蓄財招福の願いは変わらないものです。

現在、市史編さん委員会では市内の「社寺祀堂」をまとめていますが、この大般若信仰の奥書の調査により当時の歴史的な背景もかなり明らかになります。民間信仰の世界を知ることができるとともに歴史的史料として貴重なものでもありますので、「大般若経～信仰の世界～」として併せてまとめていく予定でおります。